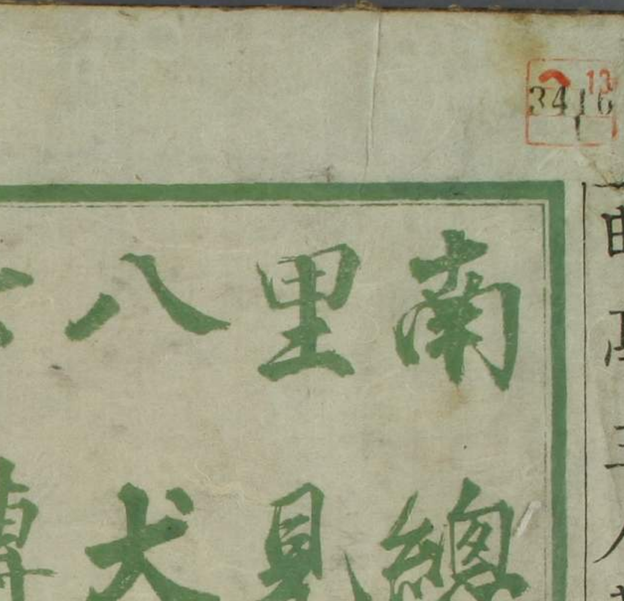
3416

曲亭主人藁本

南總里八犬士傳

柳川重信出像



八犬士傳序

初里見氏之興於安房也。德誼以率衆。英略以摧堅。平呑二總。傳之于十世。威服八州。良爲百將冠。當是時。有勇臣八人。各以犬爲姓。因稱之八犬士。雖其賢不如虞舜八元。忠魂義膽。宜與楠家八臣同年談也。惜哉載筆者希於當時。唯坊閧軍記及讀氏字考。僅足識其姓名。至今無由見其顚

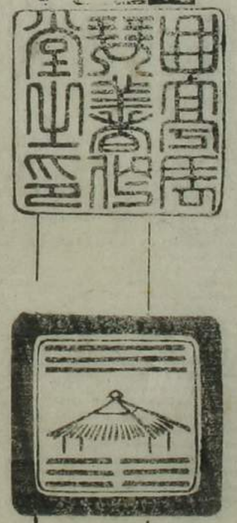
末予嘗憾之敢欲攻殘珪自是常以獵舊記不已然猶無有考据一日低迷思寢聲聽之際有客自南總來語次及八犬士事實其說與軍記所傳者不同敲之則曰曾出于里老口碑敢請主人識之予曰諾吾將廣異聞客喜而退予送之于柴門下有臥狗在門傷予忙乎踏其尾苦虧倏發足下愕然覺來則南柯一夢也回頭覽

下茅茨無客柴門無狗吠言熟思客談雖屢寐不可捨且錄之既而忘失過半莫奈之何竊取唐山故事撮合以綴之如源禮部辨龍根于王丹蘗龍經如靈鴿傳書於瀧城擬張九齡飛奴如伏姬嫁八房倣高辛氏以其女妻槃瓠其他不遑毛舉數月而草五卷僅述其濫觴未創八士列傳雖然書肆豪奪登諸梨棗剞成又乞其書名

予漫然不敢辭。即以八犬士傳命之。

文化十一年甲戌秋九月十九日。洗筆於著作堂下。紫鴛池。

簑笠陳人解撰



世ゐの里見の八犬士の大山道節（乳名犬塚信乃道松）川荘佐（乳名犬飼見八郎真平）犬江親兵衛（乳名犬村大角）犬坂毛野（乳名犬山道節）犬阪上毛（乳名犬田文吾則見）の名軍記の粗をそそ。本貫終始弘審ゆせびたいと惜むべきのみ。やまとく唐山高辛氏の皇女槃瓠犬の名もの嫁しくる故事の做ふく。個小説を作設因を推果と說て婦幼のねぶりを覚をめたり。

肇輯五巻の里見氏の安房の起るより戎演亦是唐山演義の書。その趣よ擬しもとぶ。軍記と大同小異あり。且狂言綺語をりく〳〵戎の俗語俚諺をまぜへいと嗚呼しげく綴るの固よの理。乾物のまぐべえ。

二の書第八回堀内藏人負ひ犬懸の里よ雛狗を獲る條より。第十四戎実の息女伏姫が富山の奥よ入る條まで。全體を網とるの一。二輯三輯よ及てハ人ものく列傳あり。来ん春毎よ嗣生〳〵全本となさんと両三年の裡ゆなん。

簑笠陳人再識

有像南總里見八犬傳肇輯總目錄

第一回

季基遺訓乞節

第二回

飛一箭俠者悞二白馬一

第三回

景連信時暗阻二義實一

第四回

小港義實集レ義

第五回

良將退レ策衆兵知レ仁

白龍挾レ雲歸レ南

奪二兩郡一賊臣倚二朱門一

氏元負行厄從二館山一

芭内孝吉逐レ讐

靈鴿傳レ書逆賊贈レ頭

第六回

開二倉廩一義實賑二二郡一

奉二君命一孝吉誅二三賊一

第七回

景連奸計賣二信時一

孝吉節義辭二義實一

第八回

行者石窟翁相二伏姫一

瀧田近邨狸養二雛狗一

第九回

破二盟誓一景連圍二兩城一

信二戲言一八房獻二首級一

第十回

犯レ禁孝徳喪二婦人一

裂レ腹伏姫走二八犬子一

肇輯題目通計一十回

完

浪ー中得ラ上リ龍門ニ去ル
不レ數ヒ江ー河歲ー月ノ深ヲ

雉子尒春
忍光八
難波江乃
始垂毋
辛之河尒
久尒
世波
著作堂

金碗八郎孝吉

里見治部大輔義實

周ノ公恐懼ス流言ノ日
王ノ莽ヲ謙恭ニ下ルレ士ニ時
若シ使メバ當年ヲシテ身便チ死
至ラ今ニ真偽有ン誰カ知ラ
白居易讀史ノ詩

山下柵左衛門尉定包

神餘長挾

何ゝる我おやひきそこゝろも志ゆ行ん
えこそみそちふとめてもやうる死なさ尚府

堀内藏人自行

杖倉木當吹氏元

朴平

玄蕃三

麻呂小五郎信時

安西三郎大夫景連

深宮飽食
恣猙獰
臥レ褥ニ眠レ氈ニ
慣レ不レ驚

却テ被レ捲レ簾ヲ
人ニ放出
宜シ男花ヲ下
吠ニ新晴ニ
元貢性之詩

伏姫
里見義實の
愛犬八房

東籠舎
羅文

正夢と
起き
鹿や
照射山

金鞠大輔孝徳

八犬子髪（あげ）

犬塚信乃

平居勿特汝
青年越ヲ此青
年ニ好ノ勉ムベ

犬江真平

犬村角太郎

犬田文吾

犬坂毛野

犬山道松

犬飼玄吉

犬川荘介

歳白（われあそび）地蔵之圖（のづ）

あげまきも
ゆとぐれ
なる
をもせめ
おのれ孩べと
しげる
夏草

定家卿
和歌

馬加和尚

曲亭家傳神女湯 一包百銅
精製奇應丸 大包二百粒 小包十二粒 代銀 中包三十六粒 代銀
右製藥弘所并施療 江戸飯田町中坂下南側四方みそ店向 瀧澤氏精製
取次所 大坂心齋橋筋唐物町南へ書林 河内屋太助 江戸芝神明前 書肆いつゝや市兵衛

○巻端半頁の餘帋ある故のそ嘗生要路の首を録しそ巻しそ四方の君子の告をるに左の如し

○この他者が家傳の良方婦人諸病の神薬 ○ここに記す産前産後ちのみ兒即功あり

つゝみ紙ゆゑそらち死比いようそ難産夫拊の婦人あるとき一用ひやうへほそろうよ

つゝ死虫の妙薬 一包十四銅 半包三十二銅 婦人毎月つゝやゝふうそ死つゝむゝ

つゝそらそ小用ひそ玄妙そ入産後そあり拍そうかゝるゆゑしそべそ月やゝふ功あるそ

方 ○まもそゝその功抜群自餘の賛剤よまそそるべいと敢しきことゝなん

精製奇應丸 大包二百粒 小包十二粒 代銀 中包三十六粒 代銀 但五ヶ年以下

余 小兒不仕

世ゆきあふ丸包ととゝも製薬方智剤ゆゝそもきあふ丸の功のうへさそふ製そまされい奇應丸の名ありと

賛 法ふそそび製法むつゝそりそをよのつ秘の奇應丸ふそそれいその功百倍万倍え

諸病針灸ほど巨療治 舟骨七目 九七日 呼吸の人こハ未せよのそそを澁物ハうけやゝと孩児ゞ宿形ふよそその細小坂先生出席点誌に

剤 ○まそそ七三日のり七日とゝ朝四ゝとゝよりそ

畧 ○招牌及報条能書必乾坤一草亭の印記あり此印なきそ偽剤之係表

目

東都 曲亭主人編次

第一回

季基訓を遂そ節よ死を

白龍雲を挟て南ゟ帰く

京都の将軍鎌倉の副将武威衰へそ偏執。世ゟ戦闘とろりそ比難を

東海の濱よ避そ。土地を開元基業を興し。子孫十世よ及ぶやうそ。房総の

四主そる里見治部大夫義実朝臣の事蹟をつらく考るゟ清和の皇別源

氏の嫡流。治守府将軍八幡太郎義家朝臣。十一世里見治部少輔源季基ゟ

の嫡男ゝ時よ鎌倉の持氏卿自立の志頻やと執権憲実の諫を用ひ忽地嫡

庶の義をこまれそ。室町将軍義教公と確執よ及びそ京軍猛ゝそを挙そ

憲実よ力を戮そ。且戦ひ且進そ。持氏父子を鎌倉そ。報国寺ゟ押篭そ。結

腹を切せ[ママ]ら[ママ]る。[ママ]これ後花園天皇の永享十一年二月十日のことゝかや。[ママ]時
氏の嫡男義成の父とも[ママ]自害[ママ]せ[ママ]ん。[ママ]尾を鎌倉[ママ]に留むとぞ。二男春王三男
安王とゝ[ママ]世[ママ]公達の辛く敵軍の囲を脱れて。下総[ママ]落のみを。結城氏朝[ママ]
とりて。主君と仰ぎ[ママ]ん。京都の武命[ママ]後[ママ]。管領[ママ]清方[ママ]の大軍[ママ]を[ママ]屑とせず。
されど義[ママ]仗て死をぞ[ママ]辞せざる。里見季基を首とし[ママ]。北持氏恩顧の武士
招ざれども[ママ]世集[ママ]て。結城の城を守[ママ]ぶ。大軍[ママ]囲をとゞ[ママ]。一[ママ]とせ[ママ]ど[ママ]不[ママ]
と取らず。永享十一年の春の比[ママ]。嘉吉元年の四月[ママ]まで。籠城三年[ママ]なりぬ。
外[ママ]援の兵[ママ]糧も矢種も竭果つ。今[ママ]や脱[ママ]ん途[ママ]なし。只[ママ]とも[ママ]
死[ママ]やとて結城の一族里見の主従城戸推[ママ]出[ママ]て血戦[ママ]。込[ママ]る敵[ママ]を
靡けず。衆皆討死[ママ]る[ママ]ぬ。その城竟[ママ]陥[ママ]りぬ。両公達の生擒[ママ]れ美濃の
垂井[ママ]で害せ[ママ]る。俗[ママ]の結城合戦とゝ[ママ]これ[ママ]。[ママ]抑[ママ]季基の嫡男里見

治部大夫義実ぬ[ママ]。このとき[ママ]又太郎伴[ママ]曹司と[ママ]呼れつ。年[ママ]る[ママ]九[ママ]満されば。
武勇智略[ママ]父祖[ママ]もまさ[ママ]ん。その才支道[ママ]の長さう。三年[ママ]未父と共[ママ]に竜城
の艱苦を厭ふ[ママ]。この日も猪軍[ママ]先[ママ]ん[ママ]
敵と引組[ママ]討死[ママ]んとて進[ママ]ん[ママ]。
[ママ]これ我實[ママ]勇士[ママ]元[ママ]を喪[ママ]ふ[ママ]を[ママ]
似[ママ]ざ[ママ]ども父子[ママ]共[ママ]討死せ[ママ]ば先祖[ママ]不孝[ママ]。[ママ]ま[ママ]ず[ママ]京鎌倉[ママ]を敵と[ママ]
受[ママ]て[ママ]ぞ[ママ]存ぎ[ママ]ん[ママ]。勢[ママ]揃[ママ]。力窮り[ママ]落城のけ[ママ]ぶ[ママ]。
[ママ]る[ママ]ぬ[ママ]。子[ママ]ん[ママ]又親[ママ]の[ママ]ぬ[ママ]脱れて。一命[ママ]
殺脱[ママ]ん時節[ママ]を俟て家[ママ]興[ママ]ん[ママ]。
[ママ]ば[ママ]頭[ママ]を低[ママ]うけ[ママ]ぬ。[ママ]ま[ママ]ん[ママ]
脱[ママ]ん[ママ]ん[ママ]三才の小児[ママ]要[ママ]ん[ママ]。[ママ]呪[ママ]箭[ママ]

道ことわり入りそ吹迷邪正古人の得失大概かくの如し笑ひを招く名成功遂身退天の道也先祖を辱しめず死ぬ死処こそ好けれ供とそ泣ひたれ死ぬ死処こそ好けれ

供とそ泣ひたれ死ぬ死処こそ好けれ

実微妙やうやうさうろうぐう圓頂黒衣の容貌更に昔の沙門ならねど親の教へ悖りもせず時節を俟て家を興せとのみを推辞て不孝ならずや足利持氏ぬの代相伝の主君ならずや抑ゝ祖ゝ一族ことごとく戦功あり志ざし新田の餘類南朝の忠臣ことごとく明徳三年の冬のそぐれ南帝入洛ありしより持氏の代に至るまで憑む樹下雨漏りしよう

実微妙やうやうさうろうぐう圓頂黒衣の容貌更に昔の沙門ならねど親の教へ悖りもせず時節を俟て家を興せとのみを推辞て不孝ならずや足利持氏ぬの代相伝の主君ならずや抑ゝ祖ゝ一族ことごとく戦功あり志ざし新田の餘類南朝の忠臣ことごとく明徳三年の冬のそぐれ南帝入洛ありしより憑む樹下雨漏りしよう

ろうる足利家の招を随ひもひ一亡父の理見大炊助満兼主持氏の父ぬ出仕一これ持氏ぬ義元義持氏ぬ一ようく今幼君のみまかり死も志を致さう一ここその理を辨へだにそ只死ぬる父のみ武士とのみや学問もまた

ろうる足利家の招を随ひもひ一亡父の理見大炊助満兼主持氏の父ぬ出仕一これ持氏ぬ義元義持氏ぬ一ようく今幼君のみまかり死も志を致さう一ここその理を辨へだにそ只死ぬる父のみ武士とのみや学問もまた

ろひて子ぬおくまと辞せらく敦圍父ハ義実道理ぬ青られ多ハど馬乃駑鈍へ落ま涙ハ道芝ぬ結ぶぐ死本の志なれ末の栄と親と子が後れ先ろ生死の海よりあら死鯨波の声ぬうへ進む敵軍を季基佶と見えりく時移りてうろへ一とやみとこ豫てうまろさせ一僧代の老臣杉倉木曽次氏元堀内武人負ぬ注園をまく計ぬ一俺ゝ供つまろうん

ろひて子ぬおくまと辞せらく敦圍父ハ義実道理ぬ青られ多ハど馬乃駑鈍へ落ま涙ハ道芝ぬ結ぶぐ死本の志なれ末の栄と親と子が後れ先ろ生死の海よりあら死鯨波の声ぬうへ進む敵軍を季基佶と見えりく時移りてうろへ一とやみとこ豫てうまろさせ一僧代の老臣杉倉木曽次氏元堀内武人負ぬ注園をまく計ぬ一俺ゝ供つまろうん

誘ぬくとひおくぜ木曽次ハ義実の馬の轡を牽めぐらし義人ハその馬の尻を拍て逐走らせ西を投てぞ落そゆくむらへ彼楠公が櫻井の駅よろ一その子正行を返しろおろへぬ一忠魂義膽ぬあらけんと想像り残り留る兵士ぬハ悩ゝ然とて引居ろ季基ハ落てゆくこぶ子を憂時目送ろ一今ハ心安とし一さらば一最期をいそぐとて一勒ろ縛ろ馬騎入くて一十騎ゝ足らぬ残兵を鶴翼ぬ備へて一待ろ来つる大軍へ会釈もろ一突て入ろ勇将の下ぬ弱卒ろ多ハ主も家

隷也二騎二騎。敵我相ひざるものゝごとく。彼ら呼ハ我實を後ゝとなふ
外又他事なれバ。ものゝ数ならず。大軍を一足も進せず。朗方の死骸を踏越て引組ミ
刺ちがふ。枕を臥ずどよ大将季基ハ。八騎の後卒一人もなきを
衆乱軍の中ゆ駈ゆきて。鮮血ハ野巡の草を染漆膠ハ彼此よ等しと。
馬蹄の塵よ埋ミいくどもその名ハ朽ず。立のこりたる丈夫の最もとげ
しハ最期ぞさる程よ里見寄者我實ハ。杉倉堀内よ囲れて。十町あまり
落延ゆさるゆくも厳君ハいくゆるり果ぬ。
足掻を駐めて。えろる方ハ風の声。矢叫の音嶺ゝくそや落城とおぼしくて猛火
の光天を焦せバ。吐嗟とぞろ叫びあへど。そのまゝ勢ひをぼりて騎久さんと
ろくしろ両個の老嶺左右よろ。纏よ推乍ら動せバとも物体ハ。今更のやうに
和ひめろん大殿の教訓ぞ。何とろ聞召さるゝ今落さらバ城よ還て可惜ろん身を
喪ぬべし。古歌ゆ。逃る其虫の火むしろの果敢ろの元呼為ろの。夫大信ハ信ろぞ。
大孝ハ孝ろの元ぬしと古人の金言日未よろ。口順ろのゆゝ似げるぞ。凡貴死ハ賤死ハ。
忠孝の道ハ一條ろるよ迷ひのゆゝゆゑやろろ。
和ふ孝子の哀傷頻ろゆ焦燥声ハ。
親の在ところろぞ。れど今これそも悪びるゝ人の子といふれんや。放せ。と諸を
揚て打どあれど。玉垂ぬろ等ハ忠臣の寒ゆ金石。此も縁ゆぞ鞭ろ隨ゆ雫て
ゆく。馬塩鞍勢柳坂げろハ後よ遠離ぬ火退林のほとりゆて。勝誇る強者勢。
二十騎あまり追蒐ろ。通武者態逸足てやー。雛威の猶ぞそ五枚田日ハ秋金
形の間ゆ耀く白銀ろそ。中黒の般撞ろる戎大将とろるゝ傑目欺達ー返せと唱
ろけろ。義実ハ此も擬議せどあるがまゝ
ゝ。返せと難をとあろんやとそ馬をきゝ

大將を殺せとて。杉倉堀内推竝て敵の矢面に立塞り。豬を捨て突出朋
友實に亦老當と稱せずとて馬を馳下せ前後を爭ふ主後三騎大勢乃真
中へ十文字に蒐通て。雉て巴字かたうち遣り。西に當り東に靡け北を殺
して南に走せ馬の足を立さるに三略の他。八陣の法共に知る道ならんや。
後よあり。倉皇突戰秘術を竭せ千變萬化の大力風よさしもの大勢乱
騒ざわめく。むらくと引退く。敵退けり杉倉ホハ主を練と徐と着て残兵
跟て來る端武者ハ遠笠前に射て落し。追ひちらし林原三里ゐ招魂送りして。
猶ホハ落る次日の迹ホ十六日の月圓るより追する敵ろれば主後
不思議に虎口を脱れて。その夜ハ白屋に宿りを投ゐ旦立の置土産に馬
物具ホ残ホらず。ホとせて次安を窺ふに残ふし東西をへて敵地ゐ。聊

志ゐるこゐなよあらねバ。相模路へ赴ろく。第三日ゐく三浦ゐる矢取の人家
ゐの固ゐ果む糧ゐるく。盤纏ホ乏しき旅人となりも果ゐる主後へ。
餓疲ゐく。杉ゐ根ゐ尻をうけ。遥ゐ海ゐ一堀内庵人負ゐを俟て。安房の
洲へ渡さんとて轍の魚吻あへぎ。元ゐ海原波ちゐうゐく白鷗眠る比ハ卯月の夏霞。掉遣ふ
ゐく前ゐる船山彼ゐとぞろ。指せの方ホも鑿のごく穿ゐる。ゐ一かゝく前ゐる危き。
長汀曲浦の孤の路。岌々砕くゐるひゐゐホ両を含ホ漁村の柳ホを送ゐ
遠寺の鐘いとゞ哀れを催ホめゐう。かくてあるべき方ホあらねバ杉倉木曽次氏元ハ宮屋の門ゐ乾魚
とう納ゐ白水郎ホゐるをさ招ゐ。嘯髭ホよゐ向ん前へゐてを
舟ハゐゐや。熟ぬ浦曲ゐ流浪ひゐ。いとぞ〳〵く餓ゐるふゐれハとゐあゐ君へ

物あくがれ進ろ〳〵私と化るあくがれ出るそぶ中ゟ年十四五ろる悪太郎赤熊ゟ似ろる
額髪潮風ゟ吹黒れ〳〵頬ゟ垂ろくを櫓も揚ど揉割ろど死青潟紙喰ろり
籠ろまろ空癡ろろ死ゟふろろ手つゞく合戦ゟ私ゟ過半借ろろまて漁猟
ぶゟも物足ろぬゟ誰ろ前面ゟ人をゟろまんされバ又ろの浦ゟ汲む海よろるゟ死
世ろろぶ腹ひろ吃〳〵ゟねるゟ剛ゟろまろ死糧ろろ〳〵堪ぐろきを
まゞ脾撲ろろれを食へとあざろ綾て塊を撮取つ投ろけんとろろ祖ゟ氏え
ろ死ゟ〳〵ゟ松が根ゟ尻をろけろる義実ゟ胸前へ河死
呼約ゟ限りあり。いでその隙欲到ろろ。ちひろうせんと敦圍ゟ刀ゟ鞘ゟ紙掛て

走り報ゟんとろろしろ義実ゟ急ゟ召禁め木曽次大人乳母（ゟ）麒驥ゟ老てゟ駕馬
ゟ荒り雪鳥鳳ゟ窮まるゟバ蟻蝦のゐゟ苦めろる昨ゟきのふ今ゟけふろべろ死
ゟを死れ〳〵欤彼ゟゟ敵ゟゟ足ろぬゟめろつろくゟめ紙業まるゟ土へろま囲の
基え。ゟま今安房へ没るゟ及びそ天その囲紙ゟゟの兆欤彼をゟ乳ろろる
ろ紀ゟ憎むゟ嬉ろり。これを土口祥とまろろ紀へ欤ぶべ死ろりろ〳〵ど。晋乃丈
公ゟ五鹿槽岡の地名えの故事。よく今日のろゟ似ろり。ゟゟ祝〳〵ろ塊を三度
戴さそぶまろ懐へ挟ゟ〳〵氏えゟゟ暁て刀の鞘ゟ掛〳〵ゟと五ろ怒死解ゟろろそのぴく
ろろゟ憑ろ死主君を壽さ女れゟ白水郎ゟ子どゟゟ常ゟ紙拍ろ。いよ〳〵おごそ
笑ひろり。時ゟ砥山雲叢立ろ。海面俄頃ゟ晦ろろ。磁石ゟ塵の吸ろ〳〵ど〳〵。
潮水頻りゟ逆上り。風颯ゟとを狂ろそあれ西ゟ彼鞆岡の松像ろ繁〳〵降そ死。
電光ゟろ〳〵ろ。雷さへもどろく〳〵ゟ鳴撲けバ很憧ろゟゟ劇驟さろく。

里見ト一ツ稔
義実
三浦
白龍
見る
杉倉木曽之冠兵元

堀内蛟之負利

宮屋より走り出で裡より頻りに敲けども開けざれば
せんようのなき身を以て入口の松の下落葉を敷き
臥し風雨を凌ぎ居たりしが翌朝明くるを待て
昨日の物乞ひに行んと思ひ居たりしに忽然として
白龍顕れ光を放ち浪紋を立て海の底
南を指して飛去る且つ雨霽雲も去り日は没らんとす
又もや波紋いろいろ精を物の松の雫吹拂ふ風と
共に散るかと思へば沙石の中に輒没る。
山の遠近く翠巌青苔を乾ける。聴ども尽ず絶景佳境を
見の憂と云へども止まる氏元は義実の夜の潮吹気を排ひるがへして後れ
る身と成今さらに俟ず武実海面を指して向ふ両山と烈しくて立騒ぐ
たる浪の間より普賢菩薩乗り現れ来り廻翔り彼岩のほとりより白龍の升り
双つ並び旋と問れて直と足底暁離と云ふ認めもあへず死物の股もと
おぼしく輝かやくと鱗のごとを僅ゆるとそのうるれ
その尾と足のごとく夫龍は神物と変化固より彊るし。
今眼ことて速く顕れ隠ることく深く潜む龍は誠に鱗虫の長たる所以周公
易を繋ぐことを龍を聖人に比ふるなり。百人いるとあり。龍は立夏の節成候と
欲ありとも及ぎ。ふ式のごく人或はこれを養或は御。
るの一又併説に龍王経あり。大凡両を攅るの必ずこと式編又法華経乃
提婆品の八歳の龍女成佛の説あり。若巧方便とふとも攅ず験を得ず
ものあり。この故よ龍を名づけて両王とのふその形状を
ず辨ずるとこれ角は鹿に似ず。眼は鬼の如く項は蛇に似ず。

腹は蜃に似て。鱗は魚に似たり。その爪は鷹の似く掌は虎の似く。その耳は牛
に似たり。三停九似といふ。又その含珠は頷にあり。司聴は角を以て。
喉の下長径尺なる逆鱗と名づけたり物あり。これに中るもの必ず怒らるゝと
いふ。これ故に天子の怒りを逆鱗といふ。雄龍の鳴ときは上に風
ふき雌龍の鳴ときは下に風ふく。その声は竹筒を吹ごとく。その吟ずるとき
金鉢を戛が如し。彼は敢衆行せず。又群處せず。合するときは體を
なし散るときは章をなす。雲気に乗じ陰陽に養れ。或は明に或は幽に
なり大なるときは宇宙に徜徉し小なるときは巻石の中にも隠る。春分に
天に登り。秋分に淵に入り。夏を迎れば雲を淩て鱗を奮ふ。これその時
を楽むなり。冬になれば泥に淪み潜蟠て敢出ず。これその害を避るなり。龍は
九種類ありて。飛龍あり。應龍あり。蛟龍あり。先龍あり。黄龍あり。青
龍あり。赤龍あり。白龍あり。玄龍あり。黒龍あり。白龍物を吐ときは地に入らず
金となり。紫龍涎を垂るときはその色透りて玉の如し。紫稍花は龍の精なり。
蛮貊龗にて茶に入る。鱗あるを蛟龍となす。翼あるを應龍となす。角あるを蟠龍と
いひ又蚪龍ともこれをいふ。角なきを螭龍といひ又これを蟠龍といふ。又蒼
龍は七宿なり。班龍は九色なり目百里の外をみる。これを名付て驪龍といひ
優楽自在なるもの福龍と名けたり。自在をゑざるは薄福龍。害をなすは
これ悪龍なり。人を殺すは毒龍なり。又苦しく雨を行。是則乖龍なり。又病龍のふらす
せし雨はその水必腥し。ゆゑに升天せざるもの易に所謂蟠龍なり。蟠龍も長
四丈その色青黒くして。赤帯錦文の如し。火龍は長七尺あり。その色は真紅
にして火雛炬を聚るが如し。又癡龍あり懶龍あり。龍の性は淫にして。交ざる
所なし。牛と交れば麒麟を生み豕に合へば象を生み馬と交れば龍馬を生む。

又九つの子を生む説あり。第一子を蒲牢といふ鳴ことを好むものゝ撞の撓所へ
とゞ絞象る。第二子を囚牛といふ音を好むものゝ琴鼓の飾ことゝ
子を蚩吻とのふ呑ことを好むものゝ盃盞飲器ふちに絞画く。第四子を嘲風と
いふ険を好むものゝ堂塔樓閣の尾これを象る。第五子を睚眦といふ殺ことを
ぬむものゝ大刀の飾ことゝ。第六子を負屭といふ文絞好むものゝ
いふ。第七子を狻猊といふ訟を好むものゝ第八子を狴犴とい
ふ絞好むものゝ倚子曲彔ゝ象こゝあり。第九子を覇下といふ重きを
負ことを好むものゝ。尾の足火爐の下。凡物の枕ところの鬼面のごとき
これらの外ゝ又子あり。裏章ハ囚を好ゝ饕餮ハ水絞好ゝ蜷蜴ハ喉を好ゝ
蝘蜓ハ風雨絞好ゝ螭虎ハ文采を好ゝ金猊ハ烟を好ゝ。椒圖ハ口を閉る絞
好ゝ蚣蝮ハ険ゝ立を好ゝ。贔屭ハ文絞好ゝ金吾ハ睡ざるものとぞ皆これ龍
の種類なり。大ゝるゝ龍の徳易ゝとゝくゝ乾道ゝ物ゝとゝくゝ神聖なり。
その種類の多ゝ上智と下愚とあり。天子正夫の如くなる次龍を
威徳をのく。百獣を伏するものゝ天子も亦威徳をのく百官を率ゐ故ゝ
天子ゝ衰龍の衣あり。天子の尊顔を龍顔と稱ゝ龍體を龍體と
唱ゝ怒ゝ世の絞逆鱗とゝる。ゝる是龍ゝ事ゝゝその徳枚挙べからず今や
白龍南ゝ去白ゝゝ源氏の服色ゝ南ハ則房総ここハ白里岡の素処ゝされ
その尾をゝゝ弘絞つゞ僅ゝ彼地を領せんのみ没ゝ龍の股絞ゝゝる是
こゝぶ股肱の臣ゝべし。さいひつゝやと正首ゝ和漢の書を引古実を述ゝ
ゆくゝゝその心ゝ思量り後才徹智ゝ氏元ゝく感佩一武分の家ゝ生
ゝゝも匹夫の勇ゝ誇ゝゝ兵書兵法ゝ通ゝゝゝ今の時ゝゝ

稀ふるふ。ろ尼そうころ死あん年ゆくく人もえね書をいつのやふ流つしやひ
そんさもろ〳〵ておのづから。物ふ博くへ犬の他る君ん寔ま良将ろう。今すそ
ほろせ結城ゆくる死ざろける氏元がそぢろの憾とうろう人なる命やで
よくけのまあ教びとまるまきをめるー。彩ゆくまる名の憑ー死ま日ん暮
果てひともも要ろの死入ぬふ明さんや。安房へあん住つきくろんと必人ども
船ろるー。天ん晴ても甲夜商ま月約ろふる途の夜るさ。ころろありふ焦燥
のこせんまべろろん水約えとん必べでや。後れる堀内員彩が今まぐも。
ろのあろざる王甚不審富貴ゆへ他人も合ひまぐ死時ん妻子も離る人の
城ふ経るるまべ渠ろや途ろ処ろりけんおぞつろろ〳〵。というひろ肩根うち
ようまれべ武定実莞介とうち笑ろくさる疑ひそ木曽ふ老宮忠君宮堂のの
ろ中ゆく彼と汝ん人るのこねーね表あまべ下そ約る大人撰せゆひて五侍

ふ属さもろろのうぞや。これも亦員彩ろ人とろのんろく知ろん難ふ脳く
主を棄処かるるのまあくぞ今雲時ろゆく候ん月も出へ死比るふと。
物ん障らねこの美ゆ。ひの底もいと廣き。波ろろ出る十八日の月ありーろさ
浦波や。金銭集め玉を敷龍宮城もかーやろんとく。主猴額ま武翳ー。
ろろぞも木蔭をそろれて。波寿陸へ快私一艘水崎のうこ
ろり漕出ろ。ろろるへりや。とろる犯ふそをを矢の如く間ちくろるやふ。
私の中ろう声へさく。へ寿あまべ。卯
てろると口実む一首の古歌仲正を。水主ん何ともゆそでや。そぢろふ
漕ぞろーろ件の人ん纜を。砂の中へ投ろげく。その分も内ろと登ろ立をちん
きべ振内員彩こ。ふとろろるこの主猴綽向員ま先ふ立て舊乃
拠下ま坐を白ま人員彩ん松の下そ紙掻ちせてく小瞞紙著向ま相摸

這人いづくゆくべき。渡海不便かゆゝ敷。疾く去て臭首を
彼首ろる宿屋ゆく。津弖来よとも私を出さだ。ゆをくゝく水崎よ赴ね。漁
舟を借ることとく。飯を炊せ給ねる雷雨烈ゝく
ろしくぶ。ゆゑび彼処の日を消ゝかくの如く遅ませうそ。めろこれらのゆ弖
をゃとひやべぶゝくあぶゝ石ける。といふを義実ゆあやぎそいふざる
ころ。
この次これはさろろの木曽ゆも。おゝらふ私のあろるゝ一切ゆひろけざろ弖。
の一郎人ゆろせぶ今宵ゆそう安房へこゝろ。才学ろれとと
ひこゝろゝんせう
曰い官噴賞右ゆゝ氏元ゝ額を拇入のオの長弖短弖。かくやぐ差別あるの欤
ゝんど
やよ郎人ゆゝ。かる時ゆゝ疑念も蔑りぬ。おのぶ心の淡泊ゆまよろ人ぞ。深弖思慮
ある和殿を狭ゝく。今やぐころくいひつるぇと咲つ告ぶ負約ゝ腹を
ろへ抱ころちゆ欠ゆ現二鞘の隔ろるた。兵士の交かくろそあれと義実も共ゆよ

ゑつゝ笑婦よ入ゆゆかゝる又義実ゝ郎人負約ころち對ひこれゝ前面へ渡りろて。
まくゆ没をねろどゆ堤の賜あり又白龍の祥瑞あり。これらゝ私ゆゝ彈んと
ゆつゆ　ゝる
宮ふ声をゆとりてや。水主ゝゆを抗さゝ招弖丹もう風もうゝ。そくく私よ
ゆり　ゆつぶ　ゆろり。
乗のゝと促さ随よ主後三人乗ぶゝ揺揚ぐ棚ろゝ小舟水主ゝ纜ゆ繰ゝせて。
とう　さを
取ろ不を棹のろこかくれ。安房をろてぞ漕去ぬ。
ぶゆろゝ

第二回

一箭を発ゝく俠者白馬を悞
両郡を奪ゆて賊臣朱門ゝ倚

あゝ　ゆつ。ゆゆろゆそて　あゞれろよ　ゝゆゝ
安房ゝ原總國の南邉ろり。上代ゆゝ上下の分別ろゝ。後ゆころちて上總
ゆゝ　ゝる　ゝろ
えゝろゝぶ。その國をも總といひそり。かゝく垂餌ゝ放ありて總と貢と
ゑぶ南海道阿波國ろる民をまくゝ遷ゝゆて。やぐく安房とぞ改せのひぬ。

日本書紀景行紀に所云淡の水門に是安房に僅に四郡のみにて平郡といひ長狭といひ安房といひ朝夷といふも一仁安治兼の間平家世ざろ
ろ〳〵比より。あつま三人の武士ありろ。東鑑にその名ゝえさる。御厨の麻呂五郎信俊安西三郎景盛東條七郎秋則これろ。治兼三年秋八月源頼朝卿石橋山の軍敗北そく。安房へ赴ひとひ件の武士ホ第一番ホ隨後ひそく。安西三郎景盛ハ鄉導をつとまろ。麻呂信俊東條秋則ホハ硯仮と離りそく。三人の志をあらハせりぐ源氏一統の後被人これ安房四郡をころちのりそく子孫十餘世相続〳〵世ハ北條よろつり代りへ
足利家の時おそくもその本所を失ひそ。景盛ガ十二世の孫安西三郎大夫景連ハ安房郡舘山の城よあり。信俊ガ後裔ろ。麻呂小五郎兵衛信時ハ朝夷郡平舘の城よあり。又長狭郡。東條ガ氏族ろ。神餘長狭ガ光弘ハ秋則ガ後とそく。平郡の瀧田ヨ在城せろ。ふづまも舊家とひるのぶら。神餘ハ東條ガ所領を合一そく。安房半國の主ろるゆえ長狭平郡の西郡を管領そく。家臣後数少ろらぶ人馬物具いぶさろえ物をとゝのへそく不足ろるれバ安西麻呂を下風ヨ立そく。推て西主と称一ろ。かりそ祝ヨ光弘ハところ驕りそく色を好ミ酒ヨ酖りて飽とろく側室勝妖をひろる中ヨ。玉梓とひふ淫婦を寵愛そく。内外の賞罰さへ渠ヨ問そく汝佐せーろバ玉梓ガ賄賂のみ罪あるも賞せられ。玉梓ヨ媚ざるバ功ある用られざ。これろ家則いそく乱そく。良臣ハ退去ろ。佞人ハ時を得ろ。そバ中ホ下柵左衛門定包といふありろ。是ガ父ハ青濱ろる草料場の預ゐそ。
碌こそ〳〵刃さろバ定包ハ人とるろ。相貌さ人親ヨ肖バ面ろ白一こ眉秀ろ鼻玲そ唇朱く。言語柔和の姿えありとそく。光弘とれを召出そ。

近習ゆゑそそうけ。現女調肉奏八佞人の賄左典つ定包も陽る行
状を慎さく陰ゝ奸智を逞し榮利を謀る癖者ゐるゆゑ初ろ玉梓が佞媚
どとらみとろ〳〵渠が好むねとていと八價を厭ひ贈る袖ゝ漸こゝ出ひくく。
口才主君を欺せ酒醴を侍ひ淫樂を勸め。剰玉梓と密通しく尾陋の挙
動をろりけゑども光弘八ゐだりもこれを瞭らざいく袖もるく定包を。
老臣の上ゝそゝせ藩屏の賢四罰大小とるく皆仕用こうけゑべ。その権山
下一人ゐ帰しく主君八ゐるもの八主を練ゝ
さ身退允又勢利ゝ遷るものゝまさ〳〵媚しく定包ゞ尾鬚の塵をとりしく。
嘗まを掬さく。陋を御ゑ。利害を視さく。舊法を更め。稅斂を重し。課役を
累さく民の窮をえくらざ現ろの山下定包八神餘ゞ家の祿山るるる。
そゞ出仕まる毎ゝ白馬ゝ騎しくゞ目を側さく皃をこゝるもの密さゐ白妙の

人咲馬と渾名負しくゝ途ゝあゐとゑ八避くるもヨろうけ。不題瀧田の
の近村ゝ著海巷とゐゐ杣木朴平と唱ふ。莊客あろう。戦闘の沿俗とく。
撃ゞ剣拳ゝ法いゐさろろう。膂力剛く。ところ悍く難ゝ陋さ。死をごもおそれぜ。
伝俠を左ゐけるりけゑゞ神餘の家則ゐさ乱まさく。民のこゞらひ大うこ
るゝ伝彈ゐる山下柵左典つゞ呼約ろるゞ紙ゝさく意ゝ沿媒ゞ。これゐ些ゐも
劣らざ伝洲崎の玄垢三とゐ友ゞ手ちを潜ゆゐ招允ゝ主ゐ和主ゐ伝とゞゐ
ら。白妙の人咲馬ゐ捨を恣ゐゐさ民を虐田園ゝ禍さる上蝗のむ〳〵ろり
酷〳〵罪るゑ人を屠るゝ疫鬼ゝ同ろうぜ。這奴るゐかくくあらんゐ
我も人ゐ何我ゐくゐゝ妻子を養ふべ允苟伝ゝ隨ゐもゐる皃命我
惜ゞろり彩手こゐ老とられさ餅も凍もそさらんゐ法も崇もあそろ
ろゑ呼給二人ゞ身を乗さく人咲馬を斃ゞ殺。斃の人の苦を抜ゞいと

愉をうるのみぞと。潭をさくさく垢三ハ一紙より及ぶがごとく点汚ある勇士くもいられよう。これも又ある武将ぞ。這奴ハ威勢四主ホまもなく出ると死も入ると死も数十人の後者あり。かくかくと武下さが毛を吹痂を求やせん矣の中ホ刃を隠す人の心の悪しかくの如くけふそくの黙止よう。そろほ和主をろうぐうを殺の翼を獲らばと扮をろうぐうを志をろうぐうを殺の翼を獲らばと扮をろうぐうを化よ令武失れんかくくと這奴ぞ拒山のお後者も愛くぬ微行の日を俟べそお武遂ぐとのをあらじとぞふハいろふと密語ハ朴平斜るのまを欺びくそろぐとせよ彩せんとそろぐ迭よ耳武とうくと密統数友よ及びう。現楊震ぶ四知の誡や壁ホあるも耳のある世るまぐせ安くもろのる武をろぐれ柵左歩門ゆぞ報知くる定包ハこの祢よ駆ぐくる亂者も

ろう。俄頃ホ黠兵を召襲へく。彼朴平を垢三ホを搦捕せんとそくれども。忽地ゐひてとあるくを列よ謀を獲らぐ件のつのハはぐめろう。そろそろねおりちくく只後者の数武倍し。晨よ出び夜行せびをく仇と病を生じ美酒珍譜と井うくび鄭声艶曲も楽ろう孫ホ不死の茎武蓬莱よ求め不老の術を士方士よ向けん秦皇漢武のおぢひよ異ろくまを玉梓ぐ膝を挽めくく帳中を出ざれば折てそよろとと定包ハ有一日主君ホやろくぴう。時よや夏の初ゆく。野山の新樹もいと愛く。落羽暁の野雞。青菱村の雲雀。処ろぐろよ集ろる。閑居くのく座さび病をやろそをのひろう。狗を走らせ兎放も養生のひとろよてそ某ゐん倶佳ろんおりひ立せのハぞや。とそのひ傍より玉梓これを與じう。ゐ共ホ勧ゐ名光ろ

かをとう刃を起し。これとふかくも憤くく久しく城外へ出ざりし今你達が
諫言ハ口若うくも良薬とおぼゆまこの
旨を令ちくく准備させよと仰ぶ定包扇を匆とり抒綻ぐい
ひとども近年公務いと繁くく民その課役よ労れう。加旃畑を打種
ろ〳〵もる此のまゝハ潛びく生さぜめ〳〵某ゐん佐つゝもれいよろ〳〵く
討ひいひろう。土民ホ畔伽よ牧ひろくこれをろるのふ雖ゐ仁君と
いふざるべし。これも亦民を使ふ一術よいろんえおゐ
弘感嘆大くろるもの。程道理ゆ稱へり。寔よ家の老ろれハ誰も
かくそあべれ。さてハこの後よ任せんとく。列卒後者の数を着さく那
この古七郎。天津兵内ろどのふ近習八九人のくふ後行の准佑さ也結豆光弘ハ。
草毛の馬ようち騎く。狗を牽し。夜ゑ成駕さ也潛かゆぞ出ざうける。却説

山下柵左衛門定包ハ豫く縁しるの日ぶ。前日城より退るとおぐく落羽
村長ホハ走りくりく荘客们を驅催し。途の掃除よ当帚目の少死とぐくぞ
馬驟げん杣木朴平ら垢三ホハ漸こゝふ便宜を込く。君ハ心本意を遂べ死
時来れりと竊よ欺び両人列卒よ打扮つ弓箭ゟ挟ちり出そ夜丑三の
比及ぶう。落羽畷の東北ろる夏草ふくく古ろる松を盾ホう。
定包遅しと俟さそう。短夜のまハ草墓のくく鶏鳴暁を告る比長挟ゟ
光弘ハ鹿皮の行縢よ綾蘭笠ふくく列卒をぶ馬の前よ立せ那古天津
の近臣ホぺハ九人を左右ゆくく滝田の城を出ぐぶ山下柵左衛門定包ハ豫く
非常ホ備んとく。黔兵私卒許まねく。彼白馬ようち騎つ。此後れく

うこせさろ固より謀るところの主ゝ馬奴ホさゝ荷擔れゝ。朝立の袜よ垂を加て
餌さうけん光弘の乘る馬ゆくこと十町あまりゐゝく暴よ病て拍とも進
まなびゝ前足折ゝ撲地と斗せざぬゝも倘よ輾びかゝるを那古七郎。天津兵内
慌忙ゐ扶起ゝてゐん騎替をとゝく牽と声るやふ喚立れば。後者更よ劇
惑ゝ後陣へや此ゝと告ゝぐ柵尤定包ハ鞍を揚ゝ走ゝ来つ馬より
内りとうたちゝく光弘よろこびう。潜びゝ猟よ出させのへバ。そゑとゝろぐゝハ
准備せざりし騎替を約ゆらぐ。後よ時や移らん某が馬よゝよ乘ゝ。羊来日ごろ
畜押せゝよ鞍味もいと愛ゝ。乘せのへとそゞやふゝ。繮を牽よゝとれば光弘
忽地乱るゝ内ゝゝ立させてる床んをとるのち然とゞその意よ任せど汝ハ
ゝゝ休ひゝゝ予ゞ騎替よ乘ゝ。めのども急げといひあへど鞍ゝみを
掛跨ぐ馬の尾筒も戦ぐ旦南風見ゞ衆の卯花も東も白くる隨よ樹立

隊ゐ死病者の後羽明よ近つをぬこの日の倶よたちゝりし那古天津の両臣のゝ
山下ゞ蔭伏仰ぐ。主よ仕ゝ大ゝゐゝゝゝ猛よ途伏ゝそんとゝとれば。
あゝん先よ立てる列率ゆ海ゝ。青菱村のゝゝとゝく猛よ途伏ゝそんとゝとれば。
光弘これを窃りゝく後ホハ何処行るぞ。ゝゝや
ゐゝゝく度惚ゐる狄と敦圍へ七郎兵内左右より密ゆふゆうをゆう君ハ
暁ゝせのゐぐ。乘馬の暴ゐ斃仕てゐる吉祥えとハ笑ゐよ落羽よ益馬乃
音訓かゝへ名詮自性甚忌ー。加以室町殿の武威援ゝ。兵乱休とゐる死
めゝゝ安房ハ東南の盡処るのまゞ率ゆゝゝ去ゐのまゞ
ゐゝとハ心ーもいひゝ已岩ゐ伏階びゝ出さ
とも避ぎ不祥ゆも憚のハぎ遠ゐ慮ゝゝゆさゞハ近ゐ憂とゝふせゐ猛よ
途伏かえんとせゝハこの故よゝと両人脊一練れば光弘ゆて冷笑ひ女ゝゝゐゐ

いふもあるを活る抔心死を繫一馬よ仁のうあらん。さるに又けふの將場を茲馬と
呼で諍ふ一あらん先落羽ハ落る鳥の弘ぞ獲ふる祥るべや。彼方へ行ま。と
證を鳴らし。馬の足搔を早むるぞ。那古天津ホハせんまでも。ろの草繁苑暇
道初のぞく先を追ふく。落羽ハ岡ま来ま呉れべ雪ふう
ふく躰れる。杣木朴平。洲崎ま垢三ホ木立の際ふり佶とみく白馬ま騎
ふるぞ紛ふぐうもあらぐうける。山下柵左右門定包へさんとふく伏ふる弓小笹前刺て。
きりくと弯絞り。矢比近くろる隨ま一二を定めく彈と發ーぞ。矢ハ光弘ハ白月を射られく。叫びもあへず仰さる馬ふり撞と落ーぞ。これハ。
と駭く天津兵内二の矢ま吃をぐさと射ふるぞ。
ま癖者よとハ狂ホ後者ホハ劇驟ぐのま。敵のヨヌ少を測うて。
ふもさぎりしぞ。那古七郎眼を瞪ふー。ふぐびろの兄人ふろ今眼前ホ主を

殺ーく。何う嗜嗜とあらん。ようや木立ハ浴くとも。數町ま足ようねろ岡の抔を伐
草紙芟竭ふくも。捜出さぐ己ぐ兄欤と罵あへど力を抜く。主ま離れー馬ろ
障泥を切とろく。脊とふ。引被ぐふく走登ま兄ホ裘皆ニまホ激さま讐を
定ふホ認めねども。ま兵撃ようとふんと進ミケり。朴平ま垢三ふれをえて辺づけ
てハうろハじとふく抔立の蔭ふり顕ま先ほさをに列來
十餘人瞬間ま射殺さる。ろれども彼両人ハ矢疼もふふま竭ーぶ弓ま真哩
と投棄ふ。大刀真額ま抜翳ー。发ま懸ふ砕易ーく。
奴隷ハ大ふま逃失ふう。残ふ近臣七八人力を戮ーく戦へども不知案内乃山
阪ふろ。株ま跋ニ。藤蔓ま足をとふまふく。輭瘦戎ハ疲れ戎ハ又殘ま負ざる
ろふうけり。そぶ中ま。那古七郎ハ且く賊を疲労ーく。坦地へ誰引出さんとふく。
且戦ひ且走ま兄ニ垢三ハ先ま進ミ。朴平ハ後ま続ま。脱さぐと追蒐ふろぞ。

落羽岡小次郎
村平宝垢三
ろこひろ
光弘の
きんぐる
近習と
そふ

坂を下りしが七郎倩と見えて忽地礫と石掛る。礫は垣三額を傷られ。目眩たてや倭僧とともに那古へ雌伏より走らせて。垣三が胸より乳の上へ。ひく一下と砍る斬られて仆く背の上より。七郎が右の肘を。さる程に朴平は血刀引提て。飛るのごとく馳来る。七郎ぎゃんと砍落し。怯む処を突倒して。再三さび刺を刃水流る下垂る血をも。喫て。名乗一咽喉を洞を折。前面の樹蔭より弦音一ツ。誰とは知らず飛矢ぶ。朴平が股を射さして。倒れんとして。膝を突留矢柄を砕く抜捐て耳を貫く。哄の声。砌より出と。郷音一ツ。捕んとて。その兵数十人。ぞや牛々と取巻ける。當下山下柵左右門が前を。ゃ。見弓を挾て。岡の檜より馬を馳下て囲のゆ。数代の主。民のゆゆ父母なる。殿を。戕ひなし逆賊ぶ山下定包を。縛よ。ゃ。目今一箭に射て殺さんは。鐵の鎚をもて。鶏卵を砕くより易からんとも。

炎所を除一ん生ろぐら。捕捕すと呼べば。彼縛めよと令せれば。威風に靡く。駈兵の大勢ゆ捕せを聞さら。朴平が定包と名告るをゆく仰天一原来ゴ。前ゴ射て落せ一ん人咲馬ゴあらざり。謀りしとは。孤るの勝の堺甫と翻。誣ゴ國主を害一奉れば反逆の罪脱。非脱る途なー。怨が積る山下定包擇殺ゆ。さべ。ゴ甲高ところ小門退死草ゴ伏木を潜り。曼首ゴ頭ゴ彼首ゴ。く隠れて。且く防ぎ戦よめろ。矢傷ゴ進退ちでめゴ仰ぎ。砍れども。衝ども。大勢ゴ捕ひんとて。累りて。とかくまごまごする処。ゴ。先ゴ進ー両三人左右より。組苗て。腹を切ライとするを。索をかけー。定包が時を。殺さば。ゴ。ゆゆく。癖者の。支度。を。隙ろく。捞索ゴ。と故ろり。件の二人ゴ外ゴ隠れ潜ひりのろろけ。結ゆ。城中よろ。老嬢若嬢数十人。轎子を。ゴろ。主の迎よ。ゆしろべ。定包縁由を

つげ。もろ光弘の亡骸を。橋子へ擲入させる。朴平弐幸立ち往。
告てまづ光弘の首級をとりて。主の死骸の後より跟て。滝田の城よりしづ〳〵衆皆呆果
玄垢二が首級とりて。主の死骸の後より跟て。滝田の城よりしづ〳〵衆皆呆果
たるのみ。家の老どもゐあはせども。只、定包が権威をおそれ。絶て一句も発
たるのみ。家の老どもゐあはせども。只、定包が権威をおそれ。絶て一句も発
結ふまで。当座の賊を搦ふとのみ思ひて。管領資方しらず。定包やゝ久く
結ふまで。当座の賊を搦ふとのみ思ひて。管領資方しらず。定包やゝ久く
傲慢うつ。諸司ともいまだ。近習とのみ奴僕のごく召使ひ。次の日光弘の棺
傲慢うつ。諸司ともいまだ。近習とのみ奴僕のごく召使ひ。次の日光弘の棺
と出〳〵香華院へ送る程よ。罪人杣木朴平ら。痍ざる。姫ざる。死ざる。間ゐ皆ホ
と出〳〵香華院へ送る程よ。罪人杣木朴平ら。痍ざる。姫ざる。死ざる。間ゐ皆ホ
打責られつゝ。その日獄屋よ死ホけるに。定包今〳〵首を刎さセ。玄垢二が
打責られつゝ。その日獄屋よ死ホけるに。定包今〳〵首を刎さセ。玄垢二が
首級ゐろとも。青竹の串ホさしつゝ。棟の梢よ梟さらる。加以、日未已を幾ほ
首級ゐろとも。青竹の串ホさしつゝ。棟の梢よ梟さらる。加以、日未已を幾ほ
のみ。その比皆朴平ら支党ども。一人も洩さず搦捕りつゝ。その比よ殺そうさそも
のみ。その比皆朴平ら支党ども。一人も洩さず搦捕りつゝ。その比よ殺そうさそも
朴平ら玄垢二ら。嶋ゐ海岸の民ゐゐとども。武勢ら力量人ゐ嶋ゐ神餘が家臣ホも要
朴平ら玄垢二ら。嶋ゐ海岸の民ゐゐとども。武勢ら力量人ゐ嶋ゐ神餘が家臣ホも要
せざる賊臣定包を。ゐのんとせず。志ハ剛ゐゐとども。彼が兄雄の智ホ猜ことかゐゐど。

不覚ゐ仇の悪を伐けく。戮の人を連累せり。玄弥とのみも疎ゐのべ。部親山下
不覚ゐ仇の悪を伐けく。戮の人を連累せり。玄弥とのみも疎ゐのべ。部親山下
定包ハ禅十二分ホ課ゐゐハ有一日老臣近臣ホを城中へ召聚ゐホ食送り
定包ハ禅十二分ホ課ゐゐハ有一日老臣近臣ホを城中へ召聚ゐホ食送り
ろく。ゐりホけるそ。その禅の為体定包ハ長袴ゐ烏帽子の掛緒長〳〵。大刀を
ろく。ゐりホけるそ。その禅の為体定包ハ長袴ゐ烏帽子の掛緒長〳〵。大刀を
跨つく上座ゐ推處り。又礼服の下ゐ身甲をゐる力士十二人を傑立く。おのが左右ホ
跨つく上座ゐ推處り。又礼服の下ゐ身甲をゐる力士十二人を傑立く。おのが左右ホ
侍らせさそ衷人ゐ對さいのみ。先君不處ゐ世弐去のひく。ゐん子ひとりも立
侍らせさそ衷人ゐ對さいのみ。先君不處ゐ世弐去のひく。ゐん子ひとりも立
さゞ。鄰郡ゐ択ばれ。ゐ子のごく男子ゐ。世子を立んとおもふ。館山の安西氏又平館ゐる
さゞ。鄰郡ゐ択ばれ。ゐ子のごく男子ゐ。世子を立んとおもふ。館山の安西氏又平館ゐる
麻呂氏も女子のみゐ。ゐく〳〵よろ〳〵んと間つ席をゐる。
麻呂氏も女子のみゐ。ゐく〳〵よろ〳〵んと間つ席をゐる。
ゐる面を向上ゐめもの。貪ゐろとも。よやう。山下大人ゐ徳ゐる。先君
ゐる面を向上ゐめもの。貪ゐろとも。よやう。山下大人ゐ徳ゐる。先君
ゐ功ゐゐと。滝倉の執権ゐゐ。北條氏ゐも倍ゐり。ゐ兄世子を表んとう。みづから
ゐ功ゐゐと。滝倉の執権ゐゐ。北條氏ゐも倍ゐり。ゐ兄世子を表んとう。みづから
両郡ゐ知ろ。ゐゐ君と仰ぎ。忠勤を励んよゐ。ゐでふとのいべ。と飽ぞ媚て
両郡ゐ知ろ。ゐゐ君と仰ぎ。忠勤を励んよゐ。ゐでふとのいべ。と飽ぞ媚て
回答〳〵ゐ定包芦介とうち。ゐ大ゐゐ。これよその徳ゐる。ゐ兄ども。今り衷

ぎ紙子袴の人の望を失ひく。この城ろの保ちがたけん。これ且摂州二郡を領して。徳ある人に譲るべし。野心を存ずるとうたがはるべからず。ただ一筆書ふ血を注ぐ世の常ふ酒宴を催ふして。かり渡定包を滝田の城を重ねて。王下とこれを召り。王梓をおのが嬌妻ふ一盃を勧せ。その餘光うの壁妾ふ。かりく枕席ふまゐらさせ。富貴歓楽を極めくが威を鄰郡ふ示んとて。館山平館へ使者を遣し。定包不肖ふく必ひとりくる。宴人ふ推されて長坂平郡の主となるのぬかれがえふ両君ふ好を結んとふのこと山方よりや推ふまゐ其方よりやまゐるべきとの返答をぞ乞ひける。定包これを聞て。呆果て娼と必ずと一朝の誤ふあらざらめ。これ好めどもこれふ臨く決断ふ及ばず。平館の城主うる麻呂小九郎信時が進を入を倦る。貪婪匹夫の勇将うるにて。安西ふ諜し合せく。定包を討んとそ有一日近臣のこをおく。潜ふ館山の城ふ赴ひ景連ふ対面して。定包が縛の辱めよりまさ。密談ふ。和殿某力を戮せく。安房朝夷の軍兵を引率し。瀧田の城を攻んあい。勝利疑ひうるためん。定包脱く首を授さく。彼両郡どうちとうべ悩ふうるのだや。と忽卒ふ勤視せば。景連ふ似ず左右ふうち猿臂ふ。戦内坂東大うるのうごと兵乱ふ苦めども。安房ふ主未ふ吉久ゆく。士卒馬のうへふ熟習だ。彼山下ふ大身うり。主の所領をみも濡さざらむおうまうる城ふ。その才その智測がたく。彼を推るこ主とて仕ふ貳うたへ。その徳その義推さ知るべし。天の時ふ地の理うるこ地の理ふ人の和ふまうざ定包既ふ時を沿く。地を沿ふ。人の和を沿ふうり。自他の分限を量らざて。牛角の合戦ひりふ且く渠ふ帰降まうさんとそ。

もてもあく。ふ敦まうさざるとも濮陽鴻門の一會ふ。彼范増が策成らざ労ひ功ふ

初編之一

松野勝美院

のこゝろざ草を折く蛇ゐ敬ふく後悔其の外よ方が亡且く時を俟多人一トさび滝田ゐ
ん変をまぢく衆人離ゐ員くふ至らぶ攻ぢとも必潰んをあとろへと甚れ信時
迂遠とて論區こゝろおうう。安西が近臣遠く廊うり遣うまうこゝ障
子を推開ゐ且く乱名を宣知ゐ祖ゐ主の系連結とうく。仔ぞと問ゐ小腦をまうう。
里見又太郎義実と名告れる武士年十八九とおぼしが後者僅ゐ二人をうて推
参ゐ下総結城の落人と父季基ハ討死ゐその
系ゐくいろうりてその来由を尋ゐへハ下総介秩倉堀内とゐ両個の老党とも
白濱へ来ゐ名告り。この餘の趣意ハ人傳ゐよ入るぞとゐあうぢ。ゐ入ゐ
ゐけゐと他うもるくまうぐるの。いぐつまつるべうめや。と辞ゐ退く告ーぐべ景連
頭ゐ回答ゐく。そんこうゐぢとぞうゐ眉を顰め沈吟ゐてぞおうけう。

南總里見八犬傳巻之一終